

The Whisper from Amherst

エミリーのささやき

エミリーは十代の頃から目が悪かったようで医者によくかかっていた。彼女の写真から、斜視ではなかったかと言われています。

1864年から65年には目の検査や治療でボストンまで3度ほど出かけ、合わせて1年半ばかりの長期滞在を強いられました。

この詩は1862年、31歳の頃のもので、目が見えなくなったときを想定して書かれています。エミリーは、死を宣告されることのように失明を恐れていたのです。

限りある2つの目で見ることは、限りあるものを見るだけでなく、限りなく美しい物までも見えることであり、それは心の目でとらえているからであるとエミリーは言っています。肉眼で見たいという願望は、いつのまにか心の眼で見たいという願望にすりかわり、失明を仮想することで、心でものを見たいと切実に感じるようになったのです。

Before I got my eye put out

Before I got my eye put out
I liked as well to see –
As other Creatures, that have Eyes
And know no other way –

目が見えなくなるまえは
見ることでしか生きられない
ものたちと同じように
わたしも見るのが好きだった

But were it told to me – Today –
That I might have the sky
For mine – I tell you that my Heart
Would split, for size of me –

もし今日
空を独り占めしていい
と言われたら
わたしは嬉しさに胸が張り裂けるだろう

The Meadows – mine –
The Mountains – mine –
All Forests – Stintless Stars –
As much of Noon as I could take
Between my finite eyes –

わたしの限りある二つの目にとらえられる
牧場や山 森
いつまでも煌めく星や
輝く正午が
わたしのものになるなら

The Motions of The Dipping Birds –
The Morning's Amber Road –
For mine - to look at when I liked –
The News would strike me dead –

ゆるやかに飛んでいく鳥の動き
朝の琥珀の道を
見たいときに見られると言われたら
そう聞いただけで感動のあまり死ぬだろう

So safer Guess – with just my soul
Upon the Window pane –
Where other Creatures put their eyes –
Incautious – of the Sun –

だからわたしは 窓ガラスに
ところを近づけて見た方が安全だ
他の人は 太陽を気にしないで
目を近づけるだろうけれど